

令和 6 年 5 月 8 日現在

機関番号：32689

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K20777

研究課題名（和文）移民が書く移民史のためのアクションリサーチ：在日ペルー人のデカセギ30年史の試み

研究課題名（英文）Action Research on History of Migrants Written by Migrants: Three Decades of Peruvian Migration to Japan

研究代表者

樋口 直人（Higuchi, Naoto）

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：00314831

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の最大の成果は、全体のまとめにあたる書籍の刊行である。日本語とスペイン語で同内容をバイリンガル書籍としてまとめるため、翻訳と編集作業に時間がかかった。代表者、分担者、協力者の全員が執筆し、『ペルーから日本へのデカセギ30年史 Peruanos en Japon, pasado y presente』を2024年2月に刊行した。その内容は、ペルーからのデカセギの最初の拠点となった栃木県真岡市からみたデカセギの変遷、ペルー人の事件史、労働市場の変遷、アソシエーションの変遷、カトリック（とりわけ「奇跡の主」行事）の変遷、在留資格がないペルー人、あるデカセギ者の経験という7章からなる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、ペルー人のデカセギに関する総合的な考察と分析を行ったことにある。ブラジル人とは異なる側面を多く持ちつつも、ブラジル人の陰に隠れて南米人として一括りにされがちなペルー人について、多角的に分析を行った。社会的意義は、これまで書き手ではなく表象の対象としてしか扱われてこなかったペルー人が、日本語とスペイン語の双方で自らの経験を記述し分析して発信したことにある。そのため書籍の執筆者も、日系日本人2人に対してペルー系5人となっている。そのうえ、（日本語とスペイン語の）バイリンガル書籍は、日本の移民研究で初めてである。これは、ニューカマー外国人に関する将来的な研究の先駆例たりうる。

研究成果の概要（英文）：The most important result of this project was the publication of a book that summarizes the entire project. The translation and editing of the book took a lot of time, as it is a bilingual book with the same content in both Japanese and Spanish. All the members of the project contributed to the book, "30 Years of Peruanos en Japon, pasado y presente", which was published in February 2024. It consists of seven chapters: the evolution of the Peruvian dekasegui from Moka City, Tochigi Prefecture, the first base of the Peruvian dekasegui; the history of the Peruvian case; the evolution of the labor market; the evolution of associations; the evolution of Catholicism (especially the "Lord of Miracles" event); Peruvians without residency status; and the experience of one dekasegui.

研究分野：社会学

キーワード：移民 ペルー人 非正規移民 デカセギ 外国人労働者 社会移動 日系人

## 1. 研究開始当初の背景

移民はいかにしてホスト社会の主体的な行為者となりうるのか。こうした「主体性問題」は、移民の政治参加、経済活動、文化など領域横断的なテーマとなってきたが、研究者はいわば善意の観察者として記述する役回りしか果たしてこなかった。それに対して本プロジェクトでは、アクションリサーチの手法を取り入れ、移民自身からなる研究チームに研究者が加わる形で、移民の主体性問題に対して異なるアプローチをとる。

従来の研究は「日本人」がデカセギについて知ることを目的としており、当事者はあくまで「調査対象」で歴史を評価する主体とは想定されない。マイノリティを対象とした調査で用いられるアクションリサーチは、政策策定はもちろん、歴史記述も含めて当事者が関与し、制度を変革するために編み出された方法だが、日本の移民はこの流れから取り残されている。

樋口は、これまで日系南米人を非正規雇用増の犠牲者と描いており、それ自体は間違いではないが、移民の主体性の側面を軽視してきたことに気づかされた。また、日本での「日系人受入れ失敗説」が具体的な政策となるに及んで、経済達成しかみない評価軸自体を見直す必要があると考えようになった。そうした折に、タカハシがデカセギ史を編んで世に問うとともに、それにより次世代に経験を継承したいと考えていることを知り、世代を超えて読める日西での成果刊行を骨子とするプロジェクトを立案した。

この意義は、歴史記述の主体として移民を日本社会に位置づけることにある。ポール・ギルロイヤルベン・ルンバウトなど、海外の移民二世代が移民研究に果たした役割は大きい。二世代研究者は、当該社会のマジョリティ研究者が気づかない問題を課題としたり、移民の積極的要素を取り上げて評価するなどして、パラダイム革新をもたらしてきた。日本では、移民研究者にとっての当事者への還元といえば、研究成果の謹呈や講演程度に限られていた。移民はあくまで研究の客体であり、在日コリアンを除けば移民はインフォーマントとしての地位にとどまっていた。段躍中やアンジェロ・イシは、在日中国人やブラジル人に関して精力的に発言してきたが、留学生として来日しており労働移民とはいえない。

## 2. 研究の目的

それに対してこのプロジェクトでは、移民自身からなる研究チームに研究者が加わる形で、移民の主体性問題に異なるアプローチをとる。具体的には、デカセギ一世、研究者の卵たる二世、申請者が共同で、南米から日本へのデカセギの歴史を当事者の視点で調査し、日本語とスペイン語のバイリンガルで書籍を出版することが、本研究の目的となる。

南米から日本へのデカセギは、1990年改正入管法の最大の帰結、戦後初の本格的な家族移民であることから、00年代まで多くの研究がなされてきた。しかし、リーマンショックによる大量失業・帰国以降は研究が下火になった。他方で、日系南米人自身による調査研究の機は熟している。まず、90年前後に来日した50-60代の一世は子どもが独立して余裕が生まれ、日本で学校教育を受けた二世が自らの経験を研究者として分析するようになった。これにより、一世と二世の経験を統合して全体像を提示することが可能となる。

ただし、移民自身が研究を遂行するに際して2つの問題がある。(1)一世は日本語をある程度理解できて文章を書くのは難しい、二世はスペイン語を理解できてまとまった文章を書くのは日本語となる。双方を翻訳し二言語でまとめるようなプロジェクトがなければ、知見を体系化するのは難しい。(2)二世研究者は、社会人を經由して大学院に進学しており、オーソドックスな研究者養成コースを経ていない。その結果、理論的・社会構造的な分析が困難になるため、移民研究プロパ が関わる必要が生じる。

そこで本研究では、マクロ・ミクロ(構造・組織・個人)と一世・二世(時間軸)という水準

で各人が分業し、ペルーから日本へのデカセギの30年を振り返る。これにより、30年で何が生まれ何が失われたのか、この間のバランスシートを分析する形で研究をまとめたい。

具体的には、日本社会への統合、出身地への影響、移住自体が生み出す創発的特性（新たな価値）を評価の軸とする。というのは、2018年に設けられた日系四世に対するビザが、5年限定・日本語要件・家族帯同不可であることが示すように、日系人受入れは失敗と総括されているからである。これは、狭義の統合という観点からしかデカセギの帰結を評価しておらず、ペルーへのポジティブな影響や食・音楽などでの新たな文化形成を貶価している。これに対して、研究者とデカセギ当事者が共同して多元的な評価軸を提示し、自らの経験を分析することで、新たなデカセギ30年史を提示することが最終目標となる。

### 3．研究の方法

四半世紀にわたってデカセギ研究に携わるなかで、過去10年間で感じた最大の変化は、移民が発信主体として研究と接点を持つようになったことである。それゆえ、第二世代については上述の連続講座を組織したが、一世についてもタカハシやアサトのように自らの経験を記録しようと模索する者が現れた（ペルーでは、デカセギ経験を持つAugust HigaやLuis Arriolaが、実体験をもとに小説を著している）。タカハシは、自主的なスペイン語教室であるAmauta、サンパチームであるKizunaの中心メンバーで、デカセギに関する資料を集めたFacebookページを運営している（<https://www.facebook.com/jaime.takahashi.1>）。アサトは、18年前からジャーナリストとして取材しKyodai、Mercado Latinoといった雑誌に寄稿してきた。

それに対して、第二世代が大学院に進学して論文を発表するようになったのが現段階である。協力者の小波津はドロップアウトしたペルー人二世の能動性に着目し、オチャンテはカトリック教会の教育機能について論じるなど、新たな研究の萌芽となっている。本研究の第一の意義は、こうした移民内部からの視点を加えて日本の移民研究を刷新することにある。これは他の移民集団にも応用可能な研究であり、その先鞭をつけることを企図している。さらに、デカセギ第一世代からの発信を研究に組み入れることで、移民経験の継承につながる成果を出すことが、本研究の第3の意義となる。移民が世代を超えて記憶を共有するための知的基盤は、母文化を維持するうえで決定的な重要性を持つ。成果として刊行する書籍は、選書程度の難易度を想定しており、二言語で刊行することにより家族全員で自らの歴史をたどり、世代間の相違やそれを超えて共有する要素を確認できるようにしたい。

本プロジェクトでは、こうしたポテンシャルを最大限生かす形で進めた。日系日本人からなる代表・分担者2名の研究者、協力者としてペルー系二世研究者3名、ペルー人デカセギ労働者一世2名からなる。樋口・稲葉は、下記の聞き取り調査のほか、国勢調査のオーダーメイド集計を使った論文も書いており、こうした理論とデータを用いた構造分析を行う。加えて、全体の整合性を確保し、文章を整えることで学術研究の成果としての質を担保する。小波津とオチャンテは、地域・宗教・音楽を組織水準で分析するほか、二世個人の聞き取り・分析も担当する。タカハシはデカセギ一世の個人史、アサトは一世の人物列伝を執筆する。

### 4．研究成果

本プロジェクトの研究成果は、以下の書籍に集約されている。これは、日本の移民に関してバイリンガルで刊行した初めての成果である。

『ペルーから日本へのデカセギ 30 年史：Peruanos en Japón, pasado y presente』

ハイメ・タカシ・タカハシ、エドゥアルド・アサト、樋口直人、小波津ホセ、オチャンテ・村井・ロサ・メルセデス、稲葉奈々子、オチャンテ・カルロス著、インパクト出版会、2024年

## 第1章 帰還——栃木県真岡市でのデカセギ三〇年史 ハイメ・タカシ・タカハシ

はじめに

太平洋横断—「帰郷」

真岡の出稼ぎ

カルチャーショック

エピソード

コミュニケーションの技術

社会統合—経済危機後の真岡

日系人は時代遅れ？

## 第2章 「デカセギ」三〇年の事件史——在日ペルー人の経験 エドゥアルド・アサト

はじめに

「ってきます」—リマから東京へ

フジモリと川崎市の独立記念日祝賀イベント（一九九〇年）

頑張れ！ペルー！（一九九九）

広島の恐怖（二〇〇五）

最悪の経済危機（二〇〇八—二〇〇九）

三つの複合災害（二〇一一）

埼玉県で起きた殺人事件（二〇一五）

新型コロナウイルス感染症の流行による危機（二〇二〇）

ペルー人の誉れ

在日ペルー人に関するいくつかの考察

## 第3章 在日ペルー人の仕事の変遷 樋口直人

派遣労働の内と外をめぐる三〇年史—問題の所在

三〇年で何が起きたのか—いくつかの仮説

データ分析—ペルー人労働者の経験を振り返る

結語に代えて

## 第4章 日本のペルー人アソシエーションの変遷——過去から未来へ 小波津ホセ

はじめに

移民が形成するアソシエーション

日本のペルー人アソシエーションの誕生から現在

日本の中のペルー人

おわりに

## 第5章 「奇跡の主」の祭りからみる在留ペルー人の信仰 オチャンテ・村井・ロサ・メルセデス

はじめに

ペルーの宗教と奇跡の主の起源  
ペルー人コミュニティの誕生、筆者の体験  
調査概要  
第一世代の奇跡の主  
祭りの形態について  
リーダーたちはパイプ役  
奇跡の主の祭りを越えた、教会への所属意識  
移民第二世代と奇跡の主の将来の展望  
終わりに

第6章 在留資格がないペルー人たち 稲葉奈々子  
はじめに  
在留資格の喪失  
正規化  
正規化後  
「存在しない人」へ  
日本社会への包摂  
帰国後  
おわりに

第7章 父と日本の夢 オチャンテ・カルロス  
なぜ彼の人生を語る必要があるのか  
リマへ国内移民した父の家族  
近所の教会と父  
家族と音楽  
八〇年代、貧困、そして友人との別れ  
出稼ぎの旅に  
伊賀市のカトリック教会との出会い  
日本語教室と友情の始まり  
日本でペルーの音楽活動が始まる  
帰国の夢はいずこへ  
最後に—透明人間になりたくなかった父  
スペイン語版

Prólogo

Capítulo 1 El retorno: Dekasegi en Moka, Jaime Takashi Takahashi

Capítulo 2 30 Años de Sucesos: Los peruanos del Japón, Eduardo Azato

Capítulo 3 Evolución de la situación laboral de los peruanos en Japón, Naoto Higuchi

Capítulo 4 Las Asociaciones de Peruanos en Japón: Del pasado hacia el future, José Raúl Bravo Kohatsu

Capítulo 5 La Fe de los Peruanos en Japón Vista a Través de la Festividad del Señor de los Milagros,  
Rosa Mercedes Ochante Muray

Capítulo 6 Migrantes peruanos sin papeles, Nanako Inaba

Capítulo 7 Mi Padre y el Sueño Japones, Carlos Ochante

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 樋口直人	4. 巻 829
2. 論文標題 夢を持ってない国・日本	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 部落解放	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口直人	4. 巻 5
2. 論文標題 移民政策をめぐる連立方程式 特定技能に至る経路から考える	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 グローバル・コンサーン	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 稲葉奈々子	4. 巻 5
2. 論文標題 2021年入管法廃案と仮放免者 「存在しない人たち」が動かした社会運動	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 グローバル・コンサーン	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 稲葉 奈々子	4. 巻 74
2. 論文標題 コロナ禍で困窮する外国人と反貧困運動による社会への包摂	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人権と部落問題	6. 最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉奈々子	4. 巻 143
2. 論文標題 コロナ禍の非正規滞在外国人と貧困	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 2-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉奈々子	4. 巻 4
2. 論文標題 東京五輪に招かれざる外国人	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 F visions	6. 最初と最後の頁 14-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉奈々子	4. 巻 379
2. 論文標題 「自助」奪われた非正規滞在外国人 支えは共感、その可能性と限界	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journalism	6. 最初と最後の頁 22-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉奈々子	4. 巻 276
2. 論文標題 深刻な生活と住宅の困窮 緊急支援活動のとりくみ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 議会と自治体	6. 最初と最後の頁 13-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉 奈々子	4. 巻 49 (4)
2. 論文標題 新型コロナウイルス感染拡大と非正規移民の子どもの社会的排除	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 168-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Naoto Higuchi, Sachi Takaya and Nanako Inaba	4. 巻 --
2. 論文標題 Poverty of Migrants in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Migration Governance in Asia: A Multi-Level Analysis, Routledge.	6. 最初と最後の頁 --
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口直人	4. 巻 --
2. 論文標題 反ヘイトと多文化共生	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 高谷幸編『多文化共生の実験室』青弓社	6. 最初と最後の頁 --
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口直人	4. 巻 13
2. 論文標題 多文化共生と排外主義 排外主義との対峙をめぐる2つの論理	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 理論と動態	6. 最初と最後の頁 52-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 Yuki Asahina and Naoto Higuchi	4. 巻 19
2. 論文標題 The third round of migrant incorporation in East Asia: An introduction to the special issue of friends and foes of multicultural East Asia	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Contemporary Eastern Asia	6. 最初と最後の頁 2020
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.17477/jcea.2020.19.2.001	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

[学会発表] 計29件 (うち招待講演 11件 / うち国際学会 12件)

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 何が移民政策を促進するのか - 2019年入管法における産業間の処遇格差から考える
3. 学会等名 関東社会学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 オートエスノグラフィーとは何か
3. 学会等名 シンポジウム「オートエスノグラフィーから見る移民の物語：日本を生きる10人の語り」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 日本のネイティビズム：排外主義は「若者」にとってどのように遠く、どのように近いのか
3. 学会等名 同志社大学 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 ダイバーシティは不平等を推進するのか、是正するのか：移民研究の立場から
3. 学会等名 社会学系コンソーシアムシンポジウム「ダイバーシティ推進と日本社会の<不平等>」（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 移民とナショナリズムをめぐる日本的構図：移民受入れをめぐる3つの論理の変遷
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 排外主義者の論理 3つのヘイト裁判記録を読み解く
3. 学会等名 韓国日本思想史学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 「遠くて遠い国」と「近くて遠い国」の間 日本のオリエンタリズム、ポストコロニアリズムと排外主義
3. 学会等名 日仏会館シンポジウム「日仏におけるイスラームと政治的・社会的価値観」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Naoto Higuchi
2. 発表標題 Developmentalism vs Clientelism: Which Can Better Explain Japan's Immigration Policy?
3. 学会等名 IMISCOE Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 開発主義vsクライエンテリズム - どちらが日本の移民政策を説明できるのか
3. 学会等名 関東社会学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 移民政策をめぐる連立方程式 特定技能に至る経路から考える
3. 学会等名 シンポジウム「検証・日本の移民政策」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 稲葉奈々子
2. 発表標題 2021年入管法廃案と仮放免者 「存在しない人たちが」が動かした社会運動
3. 学会等名 シンポジウム「検証・日本の移民政策」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Nanako Inaba
2. 発表標題 Resistance of Detainees and Colonialist Rule in Immigration Detention Centers
3. 学会等名 IMISCOE spring conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 稲葉奈々子
2. 発表標題 ジェンダーと人権 「日本に存在しないはず」とされる女性たちの声
3. 学会等名 団世界宗教者平和会議 (WCRP) 日本委員会女性部会40周年記念事業Action with All Beings すべての声なき声に寄り添う (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 何が移民政策を促進するのか - 2019年入管法における産業間の処遇格差から考える
3. 学会等名 関東社会学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 Japan's Immigration Policy: What's behind the Incremental Change since the 1990s?
3. 学会等名 Graduate School of International Development, Nagoya University (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 The Life World of Japan's Alt-right: Who are against the Japan-Korea Agreement on 'Comfort Women' in 2015
3. 学会等名 International Conference on Social Inclusion and Exclusion in East Asia: Its Material Condition and Discursive Structure, Jeonbuk National University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 From 'Blood Ties' to Neoliberal Meritocracy: What's New about the New Migration Regime?
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies 2021 Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 Japanese Far-right Movements and Hate Speech
3. 学会等名 International Association of Constitutional Law (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 Why Does Japan's Immigration Policy Change so Slowly? Incrementalism under the Long-term Conservative Rule
3. 学会等名 2nd Conference of East Asian Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 日本 中國 認識 問題點
3. 学会等名 (韓國)現代中國學會 2021 秋季學術大會 (招待講演) (國際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nanako Inaba
2. 発表標題 Long spring of migration in Japan: Why was the new Immigration Act of 2021 scrapped?
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies 2021 Conference (國際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nanako Inaba
2. 発表標題 Social Exclusion and Japan's Migration Policy
3. 学会等名 2nd Conference of East Asian Sociological Association (國際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 エスニック・ビジネスはいかなる条件下で成立するのか - 日本におけるエスニック・ニッチの変容、1980-2015
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 ペルーからのデカセギ30年史をめぐる社会学的分析 (2)職業と労働市場の推移
3. 学会等名 関東社会学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 外国人参政権の未来を原点に戻って考える
3. 学会等名 在日大韓国民団人権擁護委員会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 日本型排外主義をめぐる問い
3. 学会等名 「市民主体の自治する社会（まち）づくり」研修（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 在日ペルー人の仕事の変遷
3. 学会等名 シンポジウム 「ペルーから日本へのデカセギ30年史」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 稲葉奈々子
2. 発表標題 在留資格がないペルー人たち
3. 学会等名 シンポジウム「ペルーから日本へのデカセギ30年史」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Nanako Inaba
2. 発表標題 Resistance of Undocumented Migrants in Immigration Detention Centers in Japan
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 樋口 直人、稲葉 奈々子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 232
3. 書名 ニューカマーの世代交代	

1. 著者名 ハイメ・タカハシ, エドゥアルド・アサト, 樋口直人, 小波津ホセ, オチャンテ, 村井・ロサ・メルセデス, カルロス・オチャンテ, 稲葉奈々子	4. 発行年 2024年
2. 出版社 インパクト出版会	5. 総ページ数 352
3. 書名 ペルーから日本へのデカセギ30年史 : Peruanos en Japon, pasado y presente	



1. 著者名 岸見, 太一, 高谷, 幸, 稲葉, 奈々子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 200
3. 書名 入管を問う : 現代日本における移民の収容と抵抗	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	稲葉 奈々子  (Inaba Nanako)  (40302335)	上智大学・総合グローバル学部・教授   (32621)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	オチャンテ ロサ  (Ochante Muray Rosa Mercedes)  (00784042)	桃山学院教育大学・学校教育学部・准教授   (34430)	
研究協力者	オチャンテ カルロス  (Ochante Carlos)  (20617576)	奈良学園大学・人間教育学部・講師   (34604)	
研究協力者	小波津 ホセ  (Kohatsu Jose)  (32406)	獨協大学・外国語学部・非常勤講師   (32406)	
研究協力者	タカハシ ハイメ  (Takahashi Jaime)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	アサト エドゥアルド  (Azato Eduardo)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関